

同窓会会長賞

「鼻」 芥川龍之介（新潮社）

フードビジネス学科 橋本真衣

人は誰しもコンプレックスを持っている。完璧に見える人でも、何かしら他人に言えないことや、隠したいことがあるものだ。他人にとっては小さなことでも、本人にすれば重要なことで、それによって自信をなくしたり、気分が左右したりする。

物語の主人公である禅智内供もまた、あごの下までぶら下がる自分の鼻がコンプレックスであった。内供は鼻を短く見せる方法や、同じように鼻が長かった偉人を探すことで、自分を慰めようとするが、その反面、自分が鼻を気にしていることを、他人に悟られないようにしていた。彼はとてもプライドが高かったのだ。僧のなかでも高い位についていたことも関係していただろう。

私は、内供はとても人間味がある人物だと思う。例え高位な僧でも、本質は普通の人間である。もし、そこで内供がプライドを捨てて、長い鼻を気にしていることをさらけ出していたら、内供の気持ちも少しは楽になったのかもしれない。しかし、人はそれが簡単にできない。プライドが邪魔をするからだ。

人間はとてもめんどくさいものである。個性が大事といいながら、人と違うところがあるとどこか不安になる。特に日本人は他人の目を気にする傾向が強いといわれており、「空気をよむ」「周りに合わせる」ということを重要視する。だが、その行為がかえって自分を苦しめていることがある。

「人は比べると不幸になる」という言葉がある。他人と比べて落ち込んでいても仕方がない。人間はみんな十人十色であり、自分と他人が違うことは当たり前である。他人と違うところがあっても、それを個性だと受け止めることが大事なのではないだろうか。

物語は終始、長い鼻に振り回される内供の姿を描くが、他人の目におびえる人生より、周りのことなど気にせず、自分らしく人生を送りたいものである。